

# 三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第12号  
2015年3月

## 山本有三交友録

平成27年3月28日(土)▼9月6日(日)

三鷹市山本有三記念館企画展

土屋文明、豊島与志雄、菊池寛、芥川龍之介、久米正雄、井上正夫、尾上菊五郎、吉田甲子太郎、吉野源三郎、石井桃子……山本有三の交友録をながめみると、同時代の文学者をはじめ俳優、教育者、編集者など、その人脈の広がりに驚かされます。

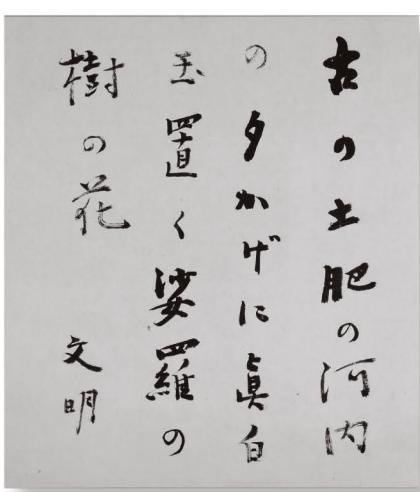
1909年、有三は22歳で第一高等学校入学。同じクラスには近衛文麿、土屋文明、豊島与志雄、山宮允がいました。しかし翌年有三はドイツ語で落第。一年級下の菊池寛、芥川龍之介、久米正雄らと机を並べることとなります。

その後有三は東京帝大独文科に進学。同大にいた土屋、豊島、芥川、久米や京都帝大に進んだ菊池らと共に第三次「新思潮」を興します。文筆家を志す同世代の友人たちを得たこと、そして彼らと切磋琢磨し合った経験は、有三にとって大きな糧となりました。

東京帝大卒業後、有三は劇作家として歩み始めます。一高在学中に知り合った新派俳優の井上正夫や六代目尾上菊五郎は、有三戯曲を語る上で欠かせない存在といえるでしょう。互いに認め合い、強い信頼関係で結ばれていたことが、有三の随筆から読み取れます。

また劇作家、小説家としてだけでなく、子ども向け教養叢書『日本少国民文庫』の編纂や明治大学文芸科長としての業績も光る有三。その傍らには吉田甲子太郎、吉野源三郎、石井桃子といった有能な右腕の存在がありました。

本展では有三が交流を深めた人々を通して、多面的ともいえる彼の仕事をふり返ります。交友録をひもとくことで浮かび上がってくる、新たな活躍の場へと有三を導いた数々の「出会い」をご覧ください。



土屋文明筆 掛軸 紙本・墨 1959年

展示室から

アララギ派の歌人として知られる土屋文明「1890-1990」は一高で有三と出会い、第三次「新思潮」に参加。井出説太郎の筆名で小説や戯曲を発表しました。

右の歌は第九歌集『青南集』(白玉書房 1967年)に「湯河原山本邸にて 1959年5月作」として収められている3首の1つです。参議院議員の任期満了後に湯河原へ移り住んだ有三と、東京青山に居を構えていた土屋が会う機会はそう多くはなかつたと考えられます。が、終生の友として交流が続いていたことを示す貴重な資料です。

また土屋は万葉集研究でも知られ、『萬葉集私注』全20巻(筑摩書房 1949-56年)の推薦文に有三はこう記しています。「なん十年と長いあいだ、目と耳とハートで、この研究を続けたことだから、いわばこれは、君のライフワークになるわけだ。(略)後世においても、権威のあるものの一つとなるに相違ない。」

# 山本有三の年譜を書き直す

武藤 康史

山本有三の年譜を読んでいて腑に落ちないことがあつた。

明治四十年の項である。

中学校を卒業し、高等学校を受験し、第六高等学校に合格したものの、父が急死したので入学をとりやめて郷里に帰つた——ということが多く年譜に書かれている。

なぜ岡山の第六高等学校だったのか。翌年には第一

高等学校を受験して不合格となり、次の年にまた受験して合格し、第一高等学校に進学した。有三にどうてはこの一高進学こそが人生の一大転機だった。一高で得た友人なしには、山本有三の文学は生れなかつただろう。第六高等学校に進んでいたとしても東京帝國大学には行けただろうが(官立の高等学校を出ていれば、どこかしらの帝国大学には入学できる仕組だつたから)、東大時代の友人より、一高時代の友人から得たもののはうがはるかに大きい。一高で近衛文麿と同級生だったからこそその中に『濁流』が書かれたわけだし、

落第させられて芥川龍之介・菊池寛・久米正雄らと同

創作以外の活動においても一高出身という学歴がもたらしたものは大きかつたはずで、何しろ一高同窓会の出している「向陵」という雑誌の「一高百年記念」の号(昭和四十九年発行)を見ると、一高は昭和二十五年三月をもつて消滅したけれども(現実には今なお一万人になんなんとする一高卒業生が、政界、財界、学界、文芸界、報道出版界その他、社会の各方面において中心的、指導的役割りを演じつづけているわけで)……などと書いてある。有三の亡くなつた昭和四十九年にして立派にこういう現実があつた。すでに明治時代の後半にはそのようになりつつあり、だからこそ山本有三は三回受験してでも一高に行つた。なのにどうして一回目は六高だったのか……。

しかしこれは調べればわかることで、要するに第一志望でない学校に回されてしまったのだ。この最初の受験のときも第一志望は一高だつたに違いない。

当時の入学願書のひな形が『旧制高等学校全書』に載つてゐるが、それを見ると第一志望から第八志望まで記入する欄がある。第八高等学校(名古屋)は明治四十一年創立だから、それ以降の願書だろうか。いや、明治四十一年からは入試制度が変るので一概には言えないが、とにかく下のほうの志望校まで書く欄があつたようだ。それを全部記入しなければいけない、というわけでもなかつたらしい。魚住折蘆といふ若くして亡くなつた評論家がいるが、この人は第一志望は一高、第二志望は七高(鹿児島)と書いた。なんとなく鹿児島に行ってみたい……という気持からそう書いたところ、合格したのは七高だつた(明治三十五年)。魚住折蘆は七高には行かず、翌年は一高のみを志望し、今度は合格した。

その話を聞いた和辻哲郎は、やはり第一志望、一高、とだけ書いて願書を出した。友人は「そんなあぶないことをするな」と言つたが、無事合格した(明治三十九年)。

このように第一志望をどこにするか迷つたとか、一高に合格しなかつたからまた受験したとか、いろんな人のそういう回想がたくさん残つてゐる。

当時、博文館から「中学世界」という雑誌が出ていた(明治三十一年創刊)。中学生のための文芸雑誌であり、その投稿欄には有三の短歌も何度か載つたことがある。これはまた受験雑誌でもあつた。高等学校を受験する際、志望校をどう書いたらいいかというのは悩ましい問題だつたらしく、明治四十年のある号では『例の志望問題』……などという言い方をしてゐる。学生一般の傾向としては、第一志望はもちろん一高、そし

て第二志望は三高(京都)、次は二高(仙台)、次は五高(熊本)……というのが多いという。七高(鹿児島)は志願者が少ない、とも書いてある。六高(岡山)の人気はそれより多少は上、というところ。

有三は恐らく、第二志望か第三志望か……何番めかはわからぬけれど、六高と書いてしまったのだろう。受かりやすそうな学校の名を忍び込ませたという面もあるうか。そうしたら、そこになつた。やっぽりいやだと思つた……。

この明治四十年、有三より二つ年下の内田百閒も第六高等学校に合格している。岡山の中学を卒業してすぐの受験であった。中学時代から女学生の恋人がおり、離れたくなつたであろう。第一志望が六高なら合格しやすかつたはずである。六高を出て東京帝国大学独文科に進み、有三の先輩となつた。中学時代の恋人とは大学在学中に結婚した。

それはともかく、有三の年譜にはもう一つ疑問がある。

改造社から昭和四年に出た現代日本文学全集第四十六篇『山本有三集・倉田百三集』に収める年譜には、明治四十年のところに、  
東京中学を卒業。高等学校の入学試験を受け、六高に合格。父はじめて喜ぶ。併しその秋、父が死去したので、入学を取消し、家事の後始末をするため、荷物を背負つて商ひをやる。

……と書いてあつたが、『父が死去したので、入学を取消し』という順番はおかしいのではないか。

この年の高等学校の入学試験は七月九日から十二日までおこなわれた(有三は第一高等学校で受験したであろう)。

合格発表は八月八日。その日の「官報」にすべての合格者の名前が載っているが、たしかに第六高等学校の

ところに『栃木県士族 山本勇造』とある(本名)。合格者は八月三十一日までに入学金一円を納付しなければならず、それが間に合わないと入学は取消しとなる。入学を許すのは九月十一日、とも書いてあつた。入学式の日だらうか。

永野賢『山本有三正伝 上巻』によれば、有三の父が亡くなつたのは九月十二日なのである。そのあと「入学を取消す」のでは辯護が合わない。

ここはやはり(当時の多くの一高志願者と同じく)六高に回されたことを不服として翌年また受験しようと(たぶん、すぐ)決心したことではないか。年譜には『父はじめて喜ぶ』とあつたが、何も六高合格を喜んだわけではあるまい。

現代日本文学館19『菊池寛・山本有三』に収める浦松佐美太郎『山本有三伝』はこの報告を聞いた父は、有三のためひどく喜んでくれた。おそらくは有三が、学問によって世に立てるのだということを、高等学校入学という事実を通して認めたためであり、安心したためであつたのではないかと解釈していた。

かつては中学進学も許さなかつた父親に対し、息子がささやかに凱歌をあげているような表現でもある。それまで息子に『喜ぶ』ことのない父親だったのか? だとすれば恨みを含んだ表現とも受け取れよう。また、この直後の「父の死」を引き立たせる修辞にもなつている。

この年譜は無署名だが、有三の自筆であろう。その後、さまざまな山本有三年譜が作られたが、ここで『父はじめて喜ぶ』の一文をそのまま使うものが多い。しかし他者が年譜を作る場合、史料から判明する事実と、自筆年譜に含まれる作家本人の述懐とを無批判に混在させるべきではない。自筆年譜の記述は引用という形にしたほうがよい。

ある文学全集の年譜では『七月、第六高等学校に合格。父がはじめて喜んだが、九月、五十六歳で死去した。入学をとりやめた』……となつていて、これでは最初から六高を受験したみたいではないか。

別の年譜では『七月、高等学校入学試験に合格し、第六高等学校に入学が決る。父は初めて進学を喜んだ』……となつていて、父は進学を喜んだわけではなく、このとき進学などしていなかないではないか。

既成の年譜をつぎはぎするところいういい加減なことになる。私ならこう書きたい。

「三月、東京中学校を卒業。七月、高等学校を受験。明治三十五年からこの年まで高等学校の入学試験は同一問題で全国一斉におこなわれ、願書には複数の志望校を書くことができた。有三の第一志望は一高だったと推定されるが、八月八日の合格発表では六高に回されていた。帰郷し、栃木県の温泉地で病氣療養中だった父に報告。『父はじめて喜ぶ』(自筆年譜)。しかし一高を目指していた有三は八月中にすべきだった六高への入学手続きをしなかつたものと推定される。九月十二日、父死去(五十六歳)。有三はそのまま実家にとどまり、店の仕事をするとともに翌年に向け受験勉強に励んだ」



武藤康史 むとう やすし



一九五八年生まれ。慶應義塾大学文学部国文科卒業。同大学院修士課程修了。評論家。著書に『国語辞典の名語釈』(ちくま学芸文庫)、『文学鶴龜』(国書刊行会)、『旧制中入学入試問題集』(ちくま文庫)などがある。また、作家の手、野口富士男隨筆集』(ワエッジ文庫)や『林美美子隨筆集』(岩波文庫)の編者も務めている。

## ガイドボランティアリポート 12

記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届けします

### 知るよろこび

三鷹の住民として街を知りたいと願い、山本有三記念館と出会いました。有三とその生活の場について学ぶにつれ、有三が単なる作家としての活動だけでなく、子どものための名作選や文庫の制作、図書館設置を通じての地域住民への貢献、さらには国会議員として国語教育等に力を注ぐ活動をした人物であることを知り、心が弾むようでした。おかげで作品の読み方も変化してきています。ガイドでは、そんな有三の事実と私の驚きをお伝えしたいと思います。

(近藤 千恵)

### ボランティアは私の生きがいの1つです

家も作品も大好きな山本有三。その記念館のボランティア募集を知ってとても嬉しく思った。

昔外国を訪れた際、美術館、科学館、航空博物館などを見学した。そこで受付、案内説明する人々はシニアのボランティアだった。いきいきとした様子で働いていた。

今私は、このボランティア活動で心に潤いを感じている。

(山崎 延子)

### ▶事業報告

#### 秋の朗読会

2014年11月3日

毎年「文化の日」に開催している秋の朗読会。11回目となる今回は、初出演の大原康裕さん（文学座）をお迎えしました。朗読作品の「津村教授」は、「帝国文学」大正8年2月号に発表された戯曲作品です。朗読会としては初めて戯曲を取り上げたばかりでなく、登場人物8人分の台詞に加えてト書きも全て朗読するという試みでしたが、最小限の動作と声のみで見事に演じ分けた大原さんの熱演に大きな拍手が贈られました。「まるで舞台を見ているようだった」「すばらしい時間だった」との感想が多く寄せられました。



朗読：大原康裕（文学座）

### 第2回山本有三記念館スケッチコンテスト 入賞作品が決まりました！



山本有三記念館賞  
「木洩れ日の下で」玉記巳奈子



市民賞  
「風ノ通り道」田村正樹



審査員賞  
「夕焼けの中の山本有三記念館」相田彩子

有三の旧居であり市有形文化財でもある建物の魅力と、「文化の薫るまち三鷹」を広く発信しようと、記念館では昨年度よりスケッチコンテストを開催しています。今回は市内外から85点のご応募をいただき、1月17日から25日まで公会堂さんさん館にてコンテストを行いました。個性豊かな作品の中から、来場者と審査員による投票で選ばれた3作品は、記念館の新たな魅力を伝えてくれます。

編集・発行

## 三鷹市山本有三記念館



〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27  
TEL 0422-42-6233 FAX 0422-41-9827  
ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日及び年末年始(12月29日～1月4日)

\*月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：300円(20名以上の団体200円)

\*中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分